慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ポール・サミュエルソン教授の思い出
Sub Title	Remembrance of Professor Paul Samuelson
Author	瀬古, 美喜(Seko, Miki)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2010
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.103, No.2 (2010. 7) ,p.317(97)- 320(100)
JaLC DOI	10.14991/001.20100701-0097
Abstract	
Notes	特集：ポール・サミュエルソン教授追悼特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20100701-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」103 巻 2 号（2010 年 7 月）

ポール・サミュエルソン教授の思い出

瀬　古　美　喜

経済学の研究・教育を職とする者として，ポール・サミュエルソン教授は，あまりにも偉大な先輩であり，私のような者がその思い出を語っても良いかと逡巡するくらいであるが，直接習ったこともあるので，筆を執ることとした。

1. サミュエルソン教授との最初の出会い

最初にサミュエルソン教授の名前を聞いたのは，慶應義塾大学の経済学部に入学してからであった。私が入学した当時はちょうど大学紛争の時期で，日吉での 2 年間で実質的に授業があったのは 1 年間分位であったように記憶しているが，日吉から三田へ進学する時にどのゼミを受験するかという選択をしなければならなかった。当時の 4 大卒の女子学生には総合職などの就職先はほとんどなかったため，大学へ入った時から一番男女の差がなく実力だけで認めてもらえる社会は学者の社会ではないかと思い，大学院に進学して学者になろうと考えていたこともあり，学問をやる限り本質論をまず学ぶのが良いと考え，理論経済学の福岡正夫先生のゼミを迷わず受験した。日吉では特に紛争があったということもあって，なかなか経済学を中心とした三田の専門科目の情報が得られなかったが，福岡先生のゼミを受験しようと思いいろいろ下調べをしていて，サミュエルソン教授の名前を初めて聞いた気がする。福岡先生のゼミの入ゼミ試験対策として，サミュエルソン教授の『経済学：7 版』（*Economics: An Introductory Analysis*）の原著と，訳本（都留重人訳，岩波書店）を対比して，日吉では習っていない経済学の専門用語などを必死に勉強した。

三田へ進学し福岡先生のゼミに入ってからは，先生から良くサミュエルソン教授のお話を伺った。また，ゼミに入ってから『経済分析の基礎』（*Foundations of Economic Analysis*）（佐藤隆三訳，勁草書房）を初めて読んだ。

その当時，福岡先生はちょうどサミュエルソン教授の一般読者向きの論説を訳した選集を，『ポール・サミュエルソン　経済学と現代』（日本経済新聞社，昭和 47 年）として刊行されていた。一般の読者向きの論説ということであったが，その中の第 1 章 1 の「経済分析と極大原理」は，分析経済

学における極大原理の役割に関するサミュエルソン教授のノーベル賞受賞記念講演であり，当時自分が勉強していた経済理論の本質を理解するのに非常に役立った。

大学院のころは，福岡先生のお手伝いをして，『サミュエルソン経済学体系：消費者行動の理論』（第2巻，勁草書房）所収の「限界効用の終焉：ベルナルデリ博士の論文に関する覚書」を訳したりした。

2. サミュエルソン教授との直接の出会い

その後，日本で就職してからMITへ留学したが，そこでサミュエルソン教授の授業を受けた。当時の大学院のミクロのコアコースは，秋学期の前半がRobert L. Bishopで，家計や企業の主体的均衡理論，後半がFranklin M. Fisherで，一般均衡理論や厚生経済学がトピックスであった。

翌年の春学期は前半がM. L. Weizmanで，資源配分理論に関する諸トピックス（生産理論，効率価格を伴うプロジェクト評価，投入産出理論，外部性，純公共財と社会的選択メカニズム，共有資源，枯渇資源，規模の経済，独占的競争均衡，次善価格付け，最適契約と所得税，価格調整対数量調整，サーチ理論）を取り上げていた。

春学期の後半が，サミュエルソン教授の授業であった。テーマは，資本理論と，厚生経済学，不確実性であった。必須で読むべき文献は，福岡先生の所で勉強していた時に知っていた論文などがほとんどであったが，とにかくサミュエルソン教授の授業での英語がわからなかった。留学するまで日本でも一人暮らしをした経験もなかったのだが，とにかく，いきなり，初めて，海外に行って一人暮らしをすることになり，しかも大学院の授業は非常に忙しくて，あっという間に授業のテーマが進行していったという記憶がある。サミュエルソン教授は，必修のミクロの授業を担当されていたわけだが，とにかく授業に見えると黒板の所へ椅子を引っ張っていって，学生がいようがいまいがお構いなしという感じで黒板の方に向かって座って，黒板の隅の方にぼそぼそとしゃべりながら字を書くという形であった。私が習った当時お幾つだったか今回計算してみたが，64歳くらいになられていたのだと思われる。断言できないがおそらく，私が授業を受けた時が大学院のコアコースを教えられた最後の年だったのではないかと思う。当時の私は，とにかく留学したばかりで右も左もわからず，まったく余裕がない状態だったので，サミュエルソン教授の授業を受けていた他の学生がどのような姿勢でサミュエルソン教授の授業を受けていたのかわからないが，あまり授業自体でしっかりノートを取ってそこで理解するという形ではなかったのではないかと思う。おそらくreading listが配布されているので，事前に論文を読んできて授業に臨んでいたのだろうと思う。サミュエルソン教授の英語は，なにしろ黒板の方に向かって座ってぼそぼそ話されるので非常に聞き取りにくかったが，英語の表現自体も英語が母国語ではない私には難しかった。講義の中でも，韻を踏んだ表現（もちろん英語で）をされたりしていたので，余計私には理解しにくかったのだと思う。

留学された経験のある方の中には同じ経験をされた方があると思うが，とにかく wit に飛んだ英語での表現がサミュエルソン教授の授業中に出てきて，native speaker の学生たちはそこで間髪を入れず笑うのだが，私は彼らと同じタイミングでは意味がわからず，他の学生が笑った後でやっと理解できたということがしばしばあった。

サミュエルソン教授の授業は，このように，私には非常に聞き取りにくかったが，校舎内でお会いする時にはとてもお元気で矍鑠（かくしゃく）とされていた。

ちなみに，大学院のマクロのコアコースは春学期から始まったが，春学期の担当は Stanley Fischer と Rudiger Dornbusch であった。トピックスは，単純なケインズモデル（在庫と乗数），IS・LM モデル，資産市場と貨幣需要モデル，消費，投資，貨幣供給と貨幣コントロール，マネタリメカニズム，インフレーションとフィリップス曲線，経済成長，開放経済などであった。秋学期からマクロのコアコースの後半が始まったが，その担当者は，最初の方が Robert M. Solow 教授で，後の方が，Lawrence H. Summers 教授であった。福岡先生の所で，『線形計画と経済分析』（ドーフマン，サミュエルソン，ソロー著，安井琢磨他訳，岩波書店）や，『成長理論』（ソロー著，福岡正夫訳，岩波書店）などの文献を勉強したこともあり，サミュエルソン教授とソロー教授は共著もあり，同じような形で MIT で教鞭を執られているのかと留学前は思っていたが，ソロー教授の授業は英語の先生が話しているような外国人でも非常にわかりやすい英語で，授業も非常にわかりやすかった。サミュエルソン教授の授業と，あまりにも対照的だったので，当時のことが今でも強烈な印象として残っている。

3. サミュエルソン教授の教え——都市経済学関連で

現在，私は日本の大学院当時勉強していたテーマ（理論経済学）とは若干異なり，応用分野，中でも都市経済学を中心に研究しているが，今回サミュエルソン教授の研究を振り返ってみて，現在研究している都市問題に関して，サミュエルソン教授の研究から学ぶことがいかに多いか改めて痛感している。

現在，私は日本の住宅価格の変動要因（なぜバブルが発生したか，また，なぜそのバブルが崩壊したか）や，アメリカのサブプライムローン問題が日本に及ぼす影響としてはどのようなことが考えられるかといったテーマに関心を持っているが，サミュエルソン教授はこれらのテーマに関しても数多くの研究をされている。『サミュエルソン経済学体系：経済動学の理論』（第 4 巻，勁草書房）の「第 IV 部：投機の理論」に所収されている諸論文は，いずれも非常に参考になる。特に，「確率的投機価格」（1971 年）という論文は，確率的動学計画法の解として価格の動きを決定するという観点で，確率的投機価格に関する非独立的ブラウン振動のモデルを厳密に導出されており，現在のこの分野の諸研究の緒となっていると考えられる。

また，『サミュエルソン経済学体系：国民所得分析』（第 1 巻，勁草書房）の「第 II 部：経済政策」

に所収されている「景気循環と都市の発展」という論文では，なぜ失業は農山村部でよりも都市中心地帯での方が多いのかといった経済政策にかかわる問題に関して，統計データを用いて景気循環理論の考え方を用いて分析されている。

このようにサミュエルソン教授は，偉大な理論経済学者であると同時に応用経済学の分野でも数多くの業績があり，現実の政策提言も活発にされており，非常に幅の広い偉大な経済学者であったと思います。心から，ご冥福をお祈りいたします。

（経済学部教授）